

納豆合戦
なっとうがっせん

菊池
きくち

寛
かん

イラスト／池内舞
いけうち
まい



みな 皆さん、あなた方は、納豆売の声を、聞いたことがありますか。朝寝坊を
 しないで、早くから目をさましておられると、朝の六時か七時頃、冬ならば、
 まだお日様が出ていない薄暗い時分から、

「なつと、なつとう！」と、あわれつぽい節を付けて、売りに来る声を聞
 くでしょう。もつとも、納豆売は、田舎には余りいないようですから、田舎
 に住んでいる方は、まだお聞きになったことがないかも知れませんが、東京
 の町々では毎朝納豆売が、一人や二人は、きつとやって来ます。

わたしは、どちらかといえ、寝坊ですが、それでも、時々朝まだ暗いうちに、

床とこの中なかで、目めをさましていと、

「なつと、なつとう！」と、いうあわれっぽい女おんなの納豆売なつとうりの声こえを、よく聞ききます。

私わたしは、「なつと、なつとう！」という声こえを聞きく度たびに、私わたしがまだ小學校しょうがっこうへ行いっていた頃ころに、納豆売なつとうりのお婆ばあさんに、いたずらをしたことを思おもい出だすのです。それを、思おもい出だす度たびに、私わたしは恥はずかしいと思おもいます。悪いことわるをしたもんだと後悔こうかいします。私わたしは、今いまそのお話はなしをしようと思おもいます。

私わたしが、まだ十一二じゅういちにの時とき、私わたしの家いえは小石川こいしかわの武島町たけしまちやうにありました。そして小石川こいしかわの伝通院でんづういんのそばにある、礪川れきせん學校がっこうへ通かよっていました。私わたしが、近所きんじよのお友達ともだち四五人ごにんと、礪川れきせん學校がっこうへ行ゆく道みちで、毎朝まいあさ納豆売なつとうりの盲目もうもくのお婆ばあさんに逢あいました。もう、六十こを越こしているお婆ばあさんでした。貧乏びんぼうなお婆ばあさんと見みえ、冬ふゆ

もボロボロの袷あわせを重ねて、足袋たびもはいていないような、可哀かわいそうな姿すがたをしておりました。そして、納豆なっとうの苞つとを、二三十にさんじゅうも持ちながら、あわれな声こえで、

「なっと、なっとう！」と、呼びながら売り歩ういているのです。杖つえを突ついて、ヨボヨボ歩あるいている可哀かわいそうな姿すがたを見ると、大抵たいていの家いえでは買かってやるよ
うでありました。

私達わたしたちは初めはじのうちには、このお婆ばあさんと擦すれ違ちがっても、誰だれもお婆ばあさんのこと
などはかまいませんでしたが、ある日ひのことです。私達わたしたちの仲間なかまで、恐戯いたずらの大將たいしょう
と言いわれる豆腐屋とうふやの吉公きちこうという子こが、向むうからヨボヨボと歩あるいて来る、
納豆なっとう売りのお婆ばあさんの姿すがたを見ると、私達わたしたちの方ほうを向むいて、

「おい、俺おれがお婆ばあさんに、いたずらをするから、見みておいで。」と言いうの
です。

● 苞つと…わらなどをたばねてものをつつんだもの。

わたしたち
私達はよせばよいのにも思いましたが、何しろ、十一二という悪戯盛りで
すから、一体吉公がどんな悪戯をするのか見ていたいという心持もあつて、
だまつて吉公の後からついて行きました。

すると吉公はお婆さんの傍へつかつかと進んで行って、

「おい、お婆さん、納豆をおくれ。」と言いました。すると、お婆さんは口
をもぐもぐさせながら、

「一銭の苞ですか、二銭の苞ですか。」と言いました。

「一銭のだい！」と吉公は叱るようになりました。お婆さんがおずおずと
一銭の藁苞を出しかけると、吉公は、

「それは嫌だ。そっちの方をおくれ。」と、言いながら、いきなりお婆さ
んの手のなかにある二銭の苞を、引ったくつてしまいました。お婆さんは、可哀

そうに、眼が見えないものですから、一銭の苞の代りに、二銭の苞を取られたことに、気が付きません。吉公から、一銭受け取ると、

「はい、有り難うございます。」と、言いながら、又ヨボヨボ向うへ行つてしまいました。

吉公は、お婆さんから取った二銭の苞を、私達に見せびらかしながら、

「どうだい、一銭で二銭の苞を、まき上げてやったよ。」と、自分の悪戯を自慢するように言いました。一銭のお金で、二銭の物を取るのには、悪戯というよりも、もつといけない悪いことですが、その頃私達は、まだ何の考もない子供でしたから、そんなに悪いことだとも思わず、吉公がうまく二銭の苞を、取ったことを、何かエライことをでもしたように、感心しました。

「うまくやったね。お婆さん何も知らないで、ハイ有難うございます、と

言ったねえ。ハハハハ。」と、私わたしが言いいますと、みんなも声こゑを揃そろえて笑わらいました。

が、吉公きちこうは、お婆ばあさんから、うまく二銭にせんの納豆なっとうをまき上げたといつても、何も学校がっこうへ持もって行いって、食たべるといふのではありません。学校がっこうへ行ゆくと、吉公きちこうは私達わたしたちに、納豆なっとうを一掴ひとつかみずつ渡わたしながら、

「さあ、これから、戦いくさごっこをするのだ。この納豆なっとうが鉄砲丸てっぽうだまだよ。これのぶっつけこをするんだ。」と、言いいました。私達わたしたちは、二組ふたぐみに別わかれて、雪合戦ゆきがっせんをするように納豆合戦なっとうがっせんをしました。キャツキャツ言いいながら、納豆なっとうを敵てきに投なげました。そして面おも白い戦いくさごっこをしました。

あくる朝あさ、又私達またわたしたちは、学校がっこうへ行いく道みちで、納豆売なっとううりのお婆ばあさんに逢あいました。

すると、吉公きちこうは、

「おい、誰か一銭持っていないか。」と言いました。私は、昨日の納豆合戦の面白かったことを、思い出しました。私は、早速持っていた一銭を、吉公に渡しました。吉公は、昨日と同じようにして、一銭で二銭の納豆を騙して取りました。その日も、学校で面白い納豆合戦をやりました。

二

その翌日です。私達は、又学校へ行く道で、納豆売のお婆さんに逢いました。その日は、吉公ばかりではありません、私もつい面白くなって、一銭で二銭の苞を騙して取りました。すると、外の友達も、

「俺にも、一銭のおくれ。」と、言いながら、みんな二銭の苞を、騙し

と
て取りました。お婆さんが、

「はい、有難うございます。」と、言っているうちに、お婆さんの手の中の二銭の苞は、見る間に二つ三つになってしまいました。

そのあくる日も、そのあくる日も、私達はこのお婆さんから、二銭の苞を騙して取りました。人の良いお婆さんも、家へ帰って売上げ高を、勘定して見ると、お金が足りないのです、私達に騙されるのに、気がついたのでしよう。そつと、交番のお巡査さんに、言いつけたと見えます。

お婆さんが、お巡査さんに言ったとは、夢にも知らない私達は、ある朝、お婆さんに出くわすと、いつもの吉公が、

「さあ、今日も鉄砲丸を買わなきゃならないぞ。」と、言いながら、お婆さんの傍へ寄ると、

「おい、お婆さん、一銭のを貰うぜ。」と、言いながら、何時ものように、二銭の苞を取ろうとしました。すると、丁度その時です。急に、グツグツという靴の音がして、お巡査さんが、急いで駆けつけて来たかと思うと、二銭の苞を握っている吉公の右の手首を、グツと握りしめました。

「おい、お前は、いくららの納豆を買ったのだ。」とお巡査さんが、怖い声で聞きました。いくら餓鬼大将の吉公だといって、お巡査さんに逢つちや堪りません。青くなつて、ブルブルふるえながら、

「一銭のです、一銭のです。」と、泣き声で言いました。すると、お巡査さんは、

「太い奴だ。これは二銭の苞じゃないか。この間中から、このお婆さんが、納豆を盗まれる盗まれると、こぼしていたが、お前達が、こんな悪戯を

やっていたのか。さあ、交番へ来い。」と、言いながら、吉公を引きずって行こうとしました。吉公は、おいおい泣き出しました。私達も、吉公と同じ悪いことをしているのですから、みんな蒼くなつて、ブルブル震えていました。すると、吉公はお巡査さんに引きずられながら、「私一人じゃありません。みんなもしたのです。私一人じゃありません。」と言つてしまいました。するとお巡査さんは、恐い眼で、私達を睨みながら、

「じゃ、みんなの名前を言つてご覧。」と言いました。そう言われると、私達はもう堪らなくなつて、「わあッ」と、一ぺんに泣き出しました。

すると、傍にじつと立っていた納豆売のお婆さんです。私達が、一緒に泣き出す声を聞くと、急に盲目の眼を、シヨボシヨボさせたかと思うと、お巡査さんの方へ、手さぐりに寄りながら、

「もう、旦那さん、堪忍して下さい。ホンのこの坊ちゃん達のいたずらだ。悪気でしたのじゃありません。いい加減に、堪忍してあげてお呉んなさい。」と、まだ眼を光らしているお巡査さんをなだめました。見ると、お婆さんは、眼に一杯涙を堪えているのです。お巡査さんは、お婆さんの言葉を聞くと、やっと吉公の手を離して、

「お婆さんが、そう言うのなら、勘弁してやろう。もう一度、こんなことをすると、承知をしないぞ。」と、言いながら、向うへ行つてしまいました。すると、お婆さんは、やっと安心したように、

「さあ、坊ちゃん方、はやく学校へいらつしやい。今度から、もうこのお婆さんに、悪戯をなさるのではありませんよ。」と言いました。私は、お婆さんの眼の见えない顔を見てみると穴の中へでも、這入りたような恥しさと、

わる
悪いことをしたという後悔とで、心こころの中なかが一杯いっぱいになりました。

このことがあってから、私達わたしたちがぶつとりと、この悪戯いたずらを止めやめたのは、申すもう迄までありません。その上うえ、餓鬼がき大将だいしょうの吉公きちこうさえ、前まえよりはよほどおとなしくなつたように見みえました。私わたしは、納豆なつとうり売ばありのお婆おんがえさんに、恩返おんがえしのため何なにかしてやらねばならないと思おもいました。それでその日ひ学校がっこうから、家うちへ帰かえると、

「家うちでは、納豆なつとうを少すこしも買かわないの。」と、お母つかさんにききました。

「お前まえは、納豆なつとうを食たべたいのかい。」と、お母つかさんがきき返かえしました。

「食たべたくはないんだけれど、可哀かわいそうな納豆なつとうり売ばありのお婆おんがえさんがいるか
ら。」と言いいました。

「お前まえが、そういふ心掛こころがけで買かうのなら、時々ときどきは買かつてもいい。お父様とうさまはお
好すきな方ほうなのだから。」と、お母つかさんは言いいました。それから、毎朝まいあさ、お婆ばあさ

んこえのきこ声きこが聞きこえきこると、おかね金もらをもら貰もらつなつな納な豆とうをか買かいかました。そおしおて、そおのお婆ばあさんばあが、来こなこくこなるとき時ときまわで、私わたしはたいいていまあいあ毎まい朝あさ、おばあ婆ばあさんばあからな納な豆とうをか買かいかました。

※読みやすさを考え、一部漢字を変更しました。

『赤い鳥』大正八年九月号 赤い鳥社より

(新仮名遣いになおしました。)